

伊藤 紫

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための予備調査

2. 実施場所

徳島県那賀郡那賀町木頭地区

徳島県徳島市

3. 実施期日

2023 年 7 月 24 日 (月) ～ 2023 年 7 月 26 日 (水)

4. 成果報告

●事業の概要

本事業では、阿波太布製造技法保存伝承会（以下、阿波太布伝承会）の活動見学および会員・地域住民への聞き取り調査を行った。博士論文研究の研究対象である「「楽しみ」を軸として伝統織物の継承を行う伝承会」の事例として阿波太布伝承会の情報を収集することで、今後、博士論文研究を進めるにあたって、他の織物伝承会・保存会と比較して共通性や差異を分析するための準備を行った。

阿波太布伝承会は、重要無形民俗文化財「阿波太布の製造技術」の保護団体であり、徳島県那賀郡那賀町木頭の太布庵（生きがい工房）を拠点に活動を行っている。本調査では、阿波太布伝承会の活動状況や見学者との関わり方、会員にとっての太布制作の位置づけ、太布制作の技術や製造中の作り手のふるまい、素材・道具・製品、地域の状況などを調べた。行程は以下の通りである。

【調査スケジュールおよび内容】

<7月24日：移動日（往路）>

<7月25日：那賀町木頭地区にて調査／その後、徳島市へ移動>

・地域住民への聞き取り

移住者が運営するゲストハウスにて、スタッフからの聞き取り。太布を紹介した地元制作の動画・書籍を視聴・閲覧。

・太布庵（生きがい工房）にて活動見学・太布製品熟覧・糸績み工程体験・聞き取り。

（阿波太布伝承会会長 A さん、会員 B さん、那賀町地域おこし協力隊員 C さん、地域住民・移住希望者の方々）

・太布の材料であるコウゾ（カジ）の畑、太布制作関連施設（カジ蒸し工程）を調査。

<7月26日：午前 徳島市内で調査>

・徳島県立図書館にて資料収集。

※7月26日午後から7月28日にかけて徳島県内で実施された集中講義に参加（本事業の対象外）。

●本事業の実施によって得られた成果

太布の技法や歴史については、先行研究で詳細な報告がある。それを踏まえ、本事業で現地調査を実施したことにより、先行研究にはない阿波太布伝承会のごく近年の動き・現状や、その中で会員・支援者が模索する継承のあり方、各自の携わり方について、情報を得ることができた。それらは、以下の3点にまとめることができる。

①人口減少のなかでの継承の模索

阿波太布伝承会は、毎週火曜日の9時から17時まで、木頭地区中心部の太布庵（生きがい工房）で活動している。重要無形民俗文化財指定を受けている阿波太布伝承会は、行政の支援を得て、専用の活動拠点（太布庵）を持ち、県立博物館とも関わるなど、比較的、制度的な枠組みが整っている。しかし、地域人口自体が減少しており、阿波太布伝承会の会員も少なくなっている。過疎化という地域社会の状況の中で、太布の技術を継承する方途が模索されている。

まず、太布の材料であるコウゾの栽培は、隣接する畑で輸出用の柚子を栽培する人に担ってもらっている。そして、人手が必要な1月の刈り取り・蒸し（カジ蒸し）・皮剥ぎ・採織・川晒しの工程には、従来は地域外からのボランティアの協力を得ていた。しかし、同時に多くの参加者を受け入れるには、宿泊・食事場所の手配が困難であった。加えて、2020年以降のコロナ禍で地域外から人が来られなくなり、作業の省略を余儀なくされた。

刈り取りからの一連の工程が大勢の共同作業であるのに対し、この後の糸績み（カジ績み）・撚りかけは、阿波太布伝承会の女性会員たちが火曜日の活動を中心に各自進めていく作業である。調査時には、最もベテランの女性会員であるBさんと、地域おこし協力隊のCさんが糸績みに取り組んでおり、報告者も糸績み・撚りかけの工程を体験させていただいた。糸績みができる人を増やすのが、太布制作を継承していく上で急務だという。

Cさんは、これから3年間、自身が専従で太布に関わることができるので、自身が太布制作の技法を身に着けつつ、これらの課題に取り組みたいという。

②地域をつなぐ継承

太布の継承を模索する動きの中で、興味深かったのは、地域性が強い太布の継承を、地域内に限定せず進めようという考えである。

ここで確認しておくとして、太布は、山深い地域で入手できる素材から川を利用して繊維を採

る点や、交通の便の悪さゆえに太布生産が盛んになった歴史をもつ点など、地域性が強い織物である。今日でも、日本で木頭地区でしか継承されていないという地域限定性は、国内外から織物制作者や研究者等が太布庵を訪れる理由の 1 つと考えられる。報告者は、本調査を通じて、自然環境も含めた地域社会全体の中で織物制作を捉える重要性を改めて認識した。

しかし、地域人口が減少する現在、地域を限った継承は困難なようである。昨年撮影された太布の PR 動画の中で、阿波太布伝承会の女性会員 D さんは、太布はもともと日本全国にあったものだから、太布の技術を木頭だけで囲い込むのではなく、各地の人が木頭に学びに来て、自分たちの地域でも作るようになり、太布の技術が広がっていくような残し方ができたらいいのではないかと話していた。

現に、徳島市の方の自宅に道具を置いて太布制作を進める阿波太布伝承会員もいる。また、木頭で太布の技術を学び、徳島市近郊でコウゾ栽培から製織まで自ら行って太布の作家として活動する人もいる。このような、木頭という地域と関わりをもちつつ、その地域外で展開される活動も、阿波太布伝承会の活動を支えているようである。

③生きがいつくり事業から各担い手の関心へ

太布庵に生きがい工房の別称がある通り、木頭地区の太布は、徳島県無形文化財指定（1970 年）を契機に 1978 年から老人の生きがい事業として復興が図られてきた。それはお年寄りが中年層の女性たちに太布織を教える事業であった。B さんは、この事業初期に、太布織を教わる立場として太布制作に取り組み始めた。以来、約 40 年間、太布に携わってきた B さんにとっては、今日も確かに、太布を制作し後輩会員や太布庵を訪ねる人々と技法を教えて交流することが生きがいといえそうである。しかし、会員がごく少人数となっている現在の阿波太布伝承会の活動は、木頭地区全体の高齢者の生きがいつくり事業には位置づけづらくなっているようにみえた。

B さん以外の会員・関係者は、太布にどのように関心をもち、活動に取り組んでいるのだろうか。定年後に阿波太布伝承会の会長となった A さんは、太布の技法もさることながら、『古事記』や『万葉集』、『源氏物語』など古い文献から読み取れる太布の歴史に関心が高く、その発信にも積極的である。また、C さんは、ヨーロッパに留学して織物を学ぶうちに、日本の織物、その中でもより古い素材に関心を抱き、那賀町の地域おこし協力隊員になったという。このように、現在の阿波太布伝承会の活動は、文化財制度・行政による一定の枠組み・支援を受けつつ、会に携わる一人ひとりの関心に応じて意味付けられ、実践されているようだ。

以上、本事業の調査は、今後、博士論文研究で織物伝承会の調査・比較・分析を進めるために重要な視点を得られるものであった。特に、人口減少のなかでの継承が模索されていること、その中で木頭地区に限定せず地域をつなぐ継承が意識されていること、太布制作の位

置づけが村による生きがいつくり事業から担い手個人の関心・経験に基づく取り組みに重心を移してきたことを明らかにすることができた。これらの視点を活かし、今後、他の織物伝承会を調査する際にも、地域の人口変動と会の継承活動の関連や、継承にかかる他地域との連携への考え方、継承活動開始当初から現在までの活動の位置づけの変化について、調査し比較・分析したい。

本事業の成果は、2024年1月の基礎演習Ⅱにおけるリサーチプロポーザルにおいて発表する予定である。

●本事業について

博士論文作成にあたっては、丹念な現地調査の積み重ねが欠かせない。報告者が研究課題としている織物伝承会に関しては、遠方や交通の不便な地域で特徴的な織物が継承されていることが多く、その継承のあり方にも地域性がある。この度、調査を行った木頭地区も、交通手段が限られ、気軽に足を運べる地域とはいいがたかったが、本事業の支援によって現地調査することができ、博士論文研究を進める上で重要な成果が得られた。

また、今回は、徳島県で実施された総研大日本歴史コースの集中講義履修と連結する形で本事業を利用した。集中講義は、報告者にとって目配りが必須な隣接分野である民俗学や地域博物館の知見を学ぶとともに、太布のほかにも藍の生産など徳島県域の自然・文化に視野を広げられるものであった。現地調査の直後に集中講義を履修できたことによって、調査で得た情報をより広い視野で捉え、分析を深めることができた。

以上のように、学生の博士論文作成に有意義で利用しやすい学生派遣事業が、今後も継続されることを望む。